

News Letter 2



保育研究センター

〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1

TEL 0538-37-0191(代表) FAX 0538-36-8800 <https://www.ssu.ac.jp>

高大連携プロジェクト

高大連携プロジェクトとして静岡県立磐田北高等学校(以下「磐田北高校」と)との共催で「子ども教育の魅力発見ツアー」を、2021年・2022年と2年連続で行ってまいりました。

このツアーは、高校生に「子ども教育の魅力」を知ってもらおうと実施しているものです。主催の磐田北高校だけでなく、磐田市内の他の高校の生徒が参加しています。子ども教育の現場を巡り、活動の様子を見学し、園長先生などのお話を聞いたり、静岡産業大学で子ども教育に関するミニ講義を受講したりしています。

2021年度は、私立の中規模な保育園、こども園、幼稚園などを巡る1日ツアーを行いました。2022年度は、日程を3日に増やし、公・私立保育園、小規模保育園、児童発達支援センターなどを巡りました。

3年目となる2023年度は、さらに新たな視点から子ども教育を発見する要素を組み込んで行う予定です。お楽しみに!



全学研究発表大会における研究成果の発表

本学では、毎年、教員による研究発表が行われ活発な議論が展開されています。2022年度は、本研究センター員である入江真理准教授がリトミックの創始者、エミール・ジャック＝ダルクローズの晩年の思想に関する発表を行いました。現在も多くの保育現場で取り入れられているリトミックですが、研究によって、「多様性は個人と社会が均衡を保つための働きであり発展の礎である」という考えがその根底にあることを明らかにしました。



学窓便り

「オリジナル仕掛け絵本 —豊かな想像力を育む—」

本学の造形表現科目は、「保育内容の理解と方法(造形I)」で子どもの造形遊びや造形表現を、「保育内容の理解と方法(造形II)」で保育者としての造形表現技法や知識を学びます。

造形IIの授業では3年生が仕掛け絵本作りに挑戦しました。仕掛けの構造の理解、対象年齢に合わせた物語の創作、造形要素「線・形」「色」「材質」について一つずつ丁寧に学びました。最後に、表紙と裏表紙をつけ、本を綴じました。

保育実習で、子どもたちに楽しんでもらえることを目標に、夏休み返上で制作した力作です。大学図書館にも展示し、多くの方に見ていただきました。



センター長が交代しました

保育研究センターが発足してから1年が経ちました。昨年度は「多様な子どもの保育」をテーマとしたセミナーの開催、キッズスクール、磐田市からの受託研究などを行いました。2023年度は、保育士等キャリアアップ研修の講師受託や、藤枝市でのキッズスクールなど新たな事業を予定しています。

今後、子どもの笑顔のためだけでなく、我々も楽しんでできる事を考えていきます。皆様とご一緒できれば嬉しく思います。良いアイデアがあれば是非お聞かせ下さい。



山田 悟史 センター長

保育研究セミナーを開催

2月7日(火)、磐田キャンパスで「多様な子どもの保育」をテーマに保育研究セミナーを対面とオンラインの両方式で開催しました。

最初に、「多様な子どもたちの保育—発達障がいを中心に—」について、本学川端奈津子准教授が、気になる行動の裏側にある特別なニーズを理解し、定型発達との違いを受け止めながら、少し視点を変えて支援の手立てを考えることについて講話をしました。

次に、「障がいのある子どもを支援する制度」について、同じく宮地由紀子准教授が、保育所、認定こども園、幼稚園などと関わりが深い障害児通所支援制度について講話をしました。

参加された保育や幼児教育、子育て支援などに携わっている皆さんからは、次の言葉が寄せられました。

- 障がいによってラベリングするのではなく、一人一人にあった支援をすること、目に見えない部分を理解することが大切だということ、先生が実際に子どもと関わっている中での具体的な例を示しながら伝えていただき、とても分かりやすかったです。
- 知っているようで、正しく分かっていないこともあったので、基本的な部分を教えていただけ良かったです。園と発達支援事業所が互いのことを理解し、連携をしていくことが必要だということに共感しました。
- 発達の多様性など、なるほどと感ずることがあり、自分や子どもたちに当てはめながら考えることができ、学びになりました。

保育研究センターでは、今後もセミナー等を開催し情報発信を続けてまいります。



卒業式で保育士養成課程の学生が表彰されました

(一社)全国保育士養成協議会 会長表彰
横山 祐季 さん



ですが、その時には楽しかった大学時代を思い出して頑張っています。

保育士養成課程での4年間は大変ではあったもののとても有意義な時間であったと思います。保育のメンバーはあまり多くはなかったですが、個性的なメンバーが集まっていて保育の授業の時間は毎回とても楽しかったです。これから働くにあたっては、子どもに慕われるような保育士となれるように一日一日を過ごしていきたいです。大変なこともたくさんあると思いますが、その時には楽しかった大学時代を思い出して頑張っています。



卒業時表彰 特別賞
又吉 健斗 さん



大学4年間、タンブリング競技の競技力向上を目指し、日々練習を重ねてきました。その結果、全日本選手権大会優勝(2021年)、ワールドカップポルトガル大会3位(2022年)、ワールドゲームズアメリカ大会4位(2022年)など、世界を相手に戦うことができる選手になることができました。

また、保育士資格取得を目指し、保育士養成課程で保育を専門的に学びました。保育実習では、実際に子どもと関わる中で様々な発見があり、1日1日がとても充実し、保育の現場ならではの実践的な学びを深めることができました。

今後は保育士として就職します。大学4年間で学んだ多くのことを活かし、たくさんのお子様たちに夢や希望を与えるスポーツ選手として、さらに、子どもと共に成長する保育士としてがんばりたいと思います。



地域課題への取り組み

～第8回ふじのくに地域・大学フォーラムにおける成果発表～

令和4年度ゼミ学生等地域貢献推進事業(ふじのくに地域・大学コンソーシアム)の地域課題、「SPACの中高校生鑑賞事業の成果に関する研究」に、保育士養成課程(入江ゼミ)の3年生(西岡那奈子さん、厚木希瞳さん、高橋呉波さん)が取り組みました。

公益財団法人静岡県舞台芸術センター(SPAC)のこれまでの様々な事業について調べることから始め、舞台公演「みつばち共和国」や「パール・ギェント」を鑑賞し、演劇について理解を深めていきました。研究の目的は、SPACの事業の一つである中高生鑑賞事業を生徒がどう評価し、その観劇体験がどのような影響を及ぼ

したのかを明らかにすることでした。鑑賞後に実施されたアンケート調査のデータを集計した後、さらに、インタビュー調査を行うなど、SPACの鑑賞事業の取り組みの成果を検討し、研究を進めました。保育実習と成果発表日が重なったため準備はとて大変でしたが、積み重ねた研究をまとめ、報告することができました。

学生は演劇の面白さを実感し、保育の表現方法としての実践的な学びにつながりました。また、当課題への取り組みは、4年次の卒業研究の足がかりとなる貴重な経験となりました。



第12回ラーニングメソッド研究会

～保育士養成の学びを保障する実践研究～

ラーニングメソッド研究会は学生の学びの質の向上を目指した本学の取り組みの一つです。

今年度は「教育の質的転換に向けて」をテーマとし、保育士養成課程では佐藤寛子准教授が「保育内容・造形表現における遠隔ライブ実習の試みとその効果的な教材の検討—大学教育における主体的・対話的で深い学びを目指して—」と題して研究発表をしました。今後も新興・再興感染症に見舞われる状況が危惧される中、「遠隔ライブ実習」に取り組み、その実践報告をしました。

遠隔ライブ実習は、

- コロナ禍におけるリスクを回避し、且つ学生の負担を軽減しながら、現場での実習に近い経験ができる
- 現場とライブで双方向的なコミュニケーションができる
- 録画機能を活用し、学生は実習を振り返ることができる
- コマ数の制約の中、保育実習を行うのは難しいが、遠隔ライブ実習では可能である

遠隔実習で用いた教材「サンドアート」は、

- 造形要素「材料(材質感)」を直接体験できる
- 子どもが十分に親しんできた「砂」が原資である
- サンドアート装置さえ準備すれば、遠隔ライブ実習という形で世界中に届けることが可能である

遠隔ライブ実習の造形教材として適していることが確認されました。



「ホームカミングデー」 ～卒業生を迎えて～

2022年11月、保育士養成課程の卒業生のための「ホームカミングデー」が開催されました。卒業生8名の参加があり、大学祭「蒼樹祭」のにぎやかな雰囲気の中、久しぶりに友人、教員と和やかな時間を過ごすことができました。参加者の近況報告からは、仕事にやりがいを感じ、社会人として活躍している様子がうかがわれました。一方で、仕事上の悩みや、保育士としての悩みも語られ、出席した教員から助言と励ましを受ける場面もありました。また、「幼稚

園教諭免許状取得のための特例措置」に関する情報提供も行い、在学中と同様、卒業生も幼稚園教諭免許取得のためにサポートがあることを周知しました。

保育士養成校における卒業生支援の重要性が高まる中、本学の「ホームカミングデー」は、すでに2回を数えます。今後も「学び続ける保育者」としての卒業生を支援し、保育の質の向上の課題に取り組みたいと考えています。



“さんだいおんがくとどけ隊” ～外国の学生に届ける「わらべうた」～

これまで、子どもたちに「音楽遊び」を届けてきた“さんだいおんがくとどけ隊”。今回は、湘南日本語学園浜松校さんに伺い、日本語を学ぶ学生の皆さんに「わらべうた」を届けました。わらべうたの多くは、日本語の言葉の抑揚が歌になったものです。わらべうたで遊びながら、自然に日本語のイントネーションに親しんでもらうことを目的としました。

「げんこつやまのためきさん」、「おちゃらかホイ」などのわらべうたを紹介しましたが、できること、できないことも含めて、すぐに楽しんでもくれる様子があり、教室は大変な盛り上がりを見せていました。また、学生の皆さんの国の子どもたちの歌を紹介してもらう場面もあり、参加した学生は言葉と節(ふし)の違いを体験することが

できました。

「わらべうた」遊びのあとは、グループに一人ずつ加わって日常会話のお手伝いをしました。休みの日の時間の過ごし方など、コミュニケーションを楽しみながら互いの理解を深めました。先生から、「授業では話すことが苦手な生徒が積極的に話しかけていた」とお聞きし、同年代ならではのリラックスした雰囲気が「話したい」という気持ちに結びついたことがわかりました。

学生は、「わらべうた」の意義を改めて認識するとともに、様々な国の人とふれあい、世界の歌と生活に目を向ける貴重な機会となりました。

